

編集後記

◇ 本号No.147においては、特集として「地域ブランド強化のための高品質食用・加工用サツマイモ品種の開発」を掲載した。本課題は平成27年に農林水産省の「農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業」に応募して採択され、平成30年からは生研支援センター「イノベーション創出強化研究推進事業」に移行して令和元年まで5年間研究を行ってきたものである。

このイノベーション事業では、7つの小課題からなる研究コンソーシアムを構成して実施したが、代表機関である農研機構次世代作物開発研究センターでは、全体の研究統括とともに、小課題①「低温耐性や病虫害抵抗性に優れる食用・加工用品種の開発」を担当した。もう一つの育成地である農研機構九州沖縄農業研究センターでは、小課題②「外観形状及び加工適性に優れる食用・加工用品種の開発」を担当した。これら育成地で選抜した有望系統を地域へ配布して各種評価を行い、農研機構北海道農業研究センターは③「寒地での有望系統の低域適応性及び品質・機能性の評価」を、北海道立総合研究機構道南農業試験場は④「寒冷地での有望系統の地域適応性評価」を、茨城県農業総合センター農業研究所は⑤「関東での有望系統の地域適応性評価及び病虫害管理技術の開発」を、鹿児島県農業開発総合センター大隅支場と鹿児島県大隅加工技術研究センターは⑥「暖地での有望系統の地域適応性評価と栽培特性解明及び加工適性の評価」を、聖徳大学人間栄養学部は⑦「有望系統の嗜好性及び調理適性の評価」をそれぞれ担当した。

このイノベーション事業からは、新品種の実成など多くの成果が得られており、今後のサツマイモ産業の発展に大きく貢献すると考えられる。

◇ 日本農業新聞が毎年新年早々に掲載している「農畜産物トレンド調査」によれば、2021年に流通業者が注目する野菜トレンドでは、サツマイモが9票を獲得してトップタイに輝き、焼き芋人気に後押しされたとみられるサツマイモに、注目が続いているようである。この調査は野菜の売れ筋動向について、日本農業新聞社が卸売会社や仲卸業者、小売り、飲食店など39社から回答を得たもので、野菜で最多の票を得たサツマイモの中では、「べにはるか」が5票を獲得、焼き芋消費の高まりから、しっとりとした食感と高い糖度で根強い人気は健在と解説している。「べにはるか」以外でも「シルクスweet」や「ひめあやか」が食味の良さで評価されている。一方、ジャガイモは3票の獲得でトップテン入りを果たしており根強い人気を得ている。特に「ホッカイコガネ」が調理のしやすさと用途の広さで評価された。

(鈴木 昭二)

いも類振興情報 第147号

2021(令和3)年4月15日発行

定価 1部 500円

年間購読料(季刊) 2,000円

発行 一般財団法人 いも類振興会

〒107-0052 東京都港区赤坂6-10-41 ヴィップ赤坂303

TEL 03-3588-1040 FAX 03-3588-1225

E-mail: imoshin@fancy.ocn.ne.jp

郵便振替 00130-1-110152

印刷 株式会社丸井工文社